

# Sikṣasamuccaya の大乗戒説

——特に Vimalakīrti-nirdeśa の引用について——

橋 本 芳 契

## 一 大乗戒の由来

仏教は大乗・小乗を通じ、戒 śīla 定 dhyāna 慧 prajñā の三学（学は *śikṣā* 学処）が修行者の根本道法であるとする。普通、戒は非を防ぎ惡を止め、定は慮を息め縁を静め、慧は惑を破り真を証すると説明するが、その趣意は戒・定を通じて慧に達するにある。従つて慧を離れて戒も定もないと同時に、戒や定を伴わしめない慧は堅固でない。慧は目的であり戒・定は方法であると云えないこともないが、戒・定に既に慧の具現を見ようとする所に仏教の体験的な一如性があると云える。大乗仏教の実践論は、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六波羅蜜（波羅蜜は *pāramitā* 度と訳す）の行であるが、そこに含まれた持戒・禪定・智慧の三者は、實質的に前の三学としてのものに他ならず、従つて小乗 Hinayāna の三学から大乗 Mahāyāna の六度への展開には、歴史的にも教理的にも興味ある問題がひそむのである。ただ、大乗仏教

に至つて般若波羅蜜 *prajāpāramitā*（智度）が著しくその地位を高め、この名を冠する經典 *sūtra* の出現が同時に大乗の起源であると考えられるほど決定的であるが、他面、小乗以来の伝習として戒は律藏、定は經藏、慧は論藏として三学がそれぞれ三藏 *tripiṭaka* (*Pāli: tri-piṭaka*) に詮表されるとする所には、慧が定とのかかわりを深くしたこと、論藏 *abhi-dharma-p.* の慧そのものを可能ならしめる般若經によつて標示された立場——具体的には空觀——の新たな提起という問題とがある。これらの問題は、もとよりそれとして採り上げるべき重要な事柄であろうが、反面からすれば、戒学あるいは律藏 *vinaya-p.* の大乗仏教における地位ということにからまつた問題とも云えるのである。律は元來、出家教団の法制であり、その制定者はもとより仏陀たる釈尊であつた。律の權威は、その制定者の威信にもとづくものであり、同時に教団の統制はこれらの威力がつづくかぎり存続したと考えるこ

とができる。仏教の教団は特に *Saṅgha* (僧伽、和合衆の義) と呼ばれるが、釈尊を中心とする原始教団においては、仏陀 (*Buddha*, 覚者) そのひと、仏陀の言葉 (*Buddhavacana*, 実質的には真理たる法 *dharma*) と共に僧伽の生活的形成およびその経営そのものが却つて教団員の重要な関心事であつたに相違ない。のち等は三者は、三宝 *Tri-ratna* の名において尊信されるが、それは特に在家信者に対する意味において積極的意義を発揮した。三宝に帰依することが事実上、仏教徒 (*Buddhist*) たることなのである。在家信者 (*śrāpatti*) の、教団側の法施に対する報酬は財施・物施の形で行われた。もとよりそれは現代人の反対給付の意識下に行われるものとは凡そ相違していただであらうが、教団生活を成立させ存続させた *outsiders* の経済的社会的支持には、インドの古代社会以来の民族的習俗にもとづく情性の力によるものが多大であつたにせよ、教会史的に或は宗教社会学的に見逃すことの出来ない大きな意義がある。これはインドを中心に仏教を考える場合、基本的に重要な事柄である。まさにそのことが、中国および日本の仏教とインド仏教との差異を生みだして来るのであつて、後者の大きな特色は前述の律の整備と共に、戒学 *śīlāśāstra* の発達であつたことができる。

ところで後世には、戒と律とが、殊にわが国および中国で文字の上ばかりでなく概念内容としても、かなり混同して用いられているが、この混用の事実そのものが或る意味で以下

に述べようとする事柄を反面から実証するものであつて、本来 *śīla* (戒) は *vinaya* (律) と相違して教団外の在家信者にも適用され得る広義の生活規律であつた。しかもその特色は *vinaya* に比してより普遍性をもつことであり、現代用語を以てすれば道徳 *morality* たるにはかならないのであり、最も簡単な「五戒」について見てもそれは(1)不殺生、(2)不偷盜、(3)不邪淫、(4)不妄語、(5)不飲酒であつて、それは仏教に特有と云えないほど宗教道徳としては普遍的なものである。従つてまた仏教がいかにほど発達し地を異にしても崩れない、また変らない性質のものである。ただ仏教としては、個々の戒がかく多元的にまた知識的に受容されることよりも、宗教的人格の形成されて行く根源の力、あるいは基本的条件としてそれが考えられたため、いわゆる「受戒」の名のもとに、それが人格的に体得されて行く手続きや操作そのものに重点が置かれた。従つて戒の背後には仏陀との生命的合一、帰依仏の精神がひそんでおり、その限り、仏陀観の進展や、ひいては仏陀の教法たる *dharma* (真理) 観の展開と共に、戒説そのものの上にも大きな発達があつたわけである。大乘仏教としてはその三蔵中、經と論の方面が主で、律蔵としては殆んど小乗のものを襲用したということは前述の事情から全く理由の無いことではないが、たとえインド仏教としてのものにあつても「大乘戒」*Mahāyāna śīla* としての発達は十分見られたのである。ここに問題としようとする *śālistava* (寂

天)の *Sikṣāsamuccaya* (漢訳「大乘集菩薩學論」)の如きはその代表的なものの一つである。

## II 'Sikṣāsamuccaya' の成立と流伝

宇井先生はインドの哲学思想発達を三期に分けて説いていられる。すなわち、

I. B.C. 800—B.C. 350 の 450年間

II. B.C. 350—A.D. 150 の 500年間

III. A.D. 150—800 の 650年間

である。B.C. 800 以前は *Veda*, *Bṛahmaṇa* が相次いで現れた「序論」の時代、インド哲学史の「本論」は *Upaniṣad* の成立以後、約1600年間にわたる時期、そして A.D. 800 以後は「余論」に属するとされた。そのうち仏教の展開は、

I. に根本仏教の地位・学説

II. に原始仏教、部派対立時代の仏教、小乗仏教の完成

III. に第一期の大乗經典、龍樹の学説、提婆羅睺羅及び其

他、小乗仏教の変遷、第二期の大乗經典、弥勒の学説、

無着の学説、世親の学説、第三期の大乗經典、瑜伽行派

と中観派、頤廢期の仏教

として夫々闡説されたが、こゝに問題とする *Sikṣāsamuccaya* なる書は実にこのIII中の最後期に成立したものである。

七〇〇年頃よりは仏教は頤廢期に入つたといひ得るであらう。是より先六〇〇年頃には經典として大乘密蔵經の如き

楞伽經の系統のものも現はれたが、既に著しく包括折衷的であつて殆ど時代を指導する力を有しないものである。また中観派瑜伽行派としても、前者の中仏護の系統に六五〇年頃月称 (*Candrakīrti*) があつて中論及び四百論に註釈し入中観論 (*Madhyamikaśāstra*) を作り、史上重要な人とせらるるも此系統は後には西藏に入り、又清浄の系統も振はず、瑜伽行派としても法称の外義淨當時多少の学者のあつたことは明かであるが、時代を代表し又は動かすが如きを見ない。

かかる時に Śaṅkara (寂天) なる人が出で、「菩提行經」(*Bodhicaryāvalāra* 入菩提行論)、「大乘宝要義論」(*Sūtra-samuccaya* 集經論)と共に「大乘集菩薩學論」(*Sikṣāsamuccaya* 集學論)を作つたのである。寂天の年代は「六五〇—七五〇年頃」と云われるのみで明確を欠き、その思想的立場も著作の上から中観派の人であることは示されても、その中の何れであるかは知られないとされる。また前述三著についても第一の漢訳および第二のチベット訳は何れも著者を龍樹とし、また集學論の漢訳も著者を法称としており、かかる誤伝や仮托が行われたこと自体「末期の仏教」たる運命を如実に示すものである。なお第一の著は自説を主とした菩提行 *bodhicaryā* の詳論であるが、第二・第三には多数の大乗經典が引用され菩提心 *bodhicitta* を中心に関係要義が明される。そこに當時の學風の一斑が示されて居ると共に菩提心を重要

視した点には眞言<sup>119</sup>mantra密教との関係があるものとして注意される。

集学論はその成立以来、今日に至るまでに既に一二〇〇年以上を経過しているが、その間にこの書が辿つた流伝の實際はどうであつたか、これまたその凡てが明かなわけでない。ただ現在われわれが手にすることのできる活字本の原本となつたサンスクリット(梵語)原典は十四五世紀の写本でニポール地方で発見されたものと云うから、少くともその頃までは同地方に行われていたことが分る。それは恐らくインド中観派とその命脈を同じくしたもので、むしろチベットに渡つて相当盛んに読まれたものと考えられる。集学論のチベット語訳は九世紀の初め二人のインド人と一人のチベット人(名は ye-se-gede)との協力によつて行われたと云われ、訳本(藏名 'bslab-pa kun-las-bus-pa)の初頁には寂天( Tib.: shi-ba lha) と ye-se-gede(梵名 Jñānaśrī) 二人の肖像を掲げると云うことであるが予は未だこれを見ていない。ただこれによつてチベットではこの書が寂天の名において行われたことと、チベット人が自国人の翻訳に誇りをもつたことは分る。さらにチベット藏経中に左の諸書を蔵することからも、寂天ならびに彼の著作のチベット人に与えた思想的宗教的影響の少くなかつたことが知られる。<sup>120</sup>

1. *de-bshin-g-segs-pahi sñit-pohi yi-ge brya-pahi bsrut-ba*  
*dei sdig-pa bñags-pahi cho-ga* (梵: Tathāgata-hṛdaya-pā-

*de-dśanāvidhi-sūtra-pāṭispara-rakṣa*)  
2. *bslab-pa kun-las-bus-pahi tshig-lehur byae-pa* (梵:

*śiṣṭānucaya-kārikā*)

3. *bslab-pa kun-las-bus-pahi mñon-par-rogs-pa śee-bya-ba*  
(梵: Śiṣṭānucaya-bhīṣmayā nāma).

転じて、中国には集学論は宋代に法護(Dharmarakṣa)によつて(1058彼が九十六歳で歿したのち日称等が続行)漢訳された。法護・日称共にインド人であるから梵語は自在であり集学論の内容にも精通していたに相違ないが、中国人側に十分な協力者を得られなかつたせいから、この論の漢訳『大乘集菩薩学論』は兎角不評判であり、従つてチベットで見られたほどの流行も見ないで終つたようである。そこにはインドとチベットほどの生活的接近や類似が、インドと中国との間には見出し難いという事情もあつたと思う。インドの戒学<sup>121</sup>śīlaśāstraに対応するものは中国では「清規<sup>しんぎ</sup>」であつたろうが、生活を規律する客観的条件の相違が、戒精神としては一貫するものがあつても集学論への欲求度を減じたことは十分考えられることである。それゆえ中国および日本の仏教としては戒学に関する形而下的な方面では「清規」に対して十分注意を払うべきで、禅苑が中国や日本の文化に対して与えた精神的影響は、かえつてかかる方面から出たものが少くないのである。現代人の集学論への積極的関心は約六〇年前ヨローパにおけるその梵語原典出版に機縁するといつてよからう。<sup>(20)</sup>

### 三 'Sikṣāsamuccaya' の内容と特色

集学論はその名義からすれば *sikṣā* (学、学処) 一般の論で、戒ばかりでなく定・慧にもわたり、また実際、内容的に検討してもそうである所にこの書の特徴があるが、いわゆる *saṃuccaya* (集成) に相応する所集総論が主として初期大乘經典である所に、この論の意図するものが龍樹もしくは龍樹以前の立場に復帰しようとする一種の復古運動であつたことを物語つており、同時に引用の内容が専ら修行者の実践項目についてであることから、この論は大乘戒について一つの主張をなすものと理解することができるであろう。のみならず、寂天がかかる引用の一つのインデックスとして附した自作の偈頌には宗教詩としての深い文学的価値が蔵せられているのであり大乘仏教教理の枢要はかかる文学形式に載せられて高くまた広く歌われるものとされたから、これは決して単なる經典の抄録の意味にとどまるものではないのである。現にチベットではこの偈頌(27頌ある)だけが抜き出して誦せられたことと既出のとおりで、そこには作者の思想の深さ広さと共に詩人としての才分をも見るべきで、この方面からする人格的感化には偉大なものがあつたとしてよい。經典を聖教量 (*śāstra, āmāya*) として数多く引くこと自体、彼の宗教人としての謙虚さ、人間としての高さを示すものであつて、この論に独創性がないなどすることは凡そ物をその表面からしか

見ることの出来ないひとのすることではなからうか。  
左に梵語原典と漢訳との対比を試みよう。

#### Sikṣāsamuccaya

大乘集菩薩学論

1. <i>Dānapāramitā</i>	(1, 2, 3, 4)	集布施学品才一
2. <i>Śīlapāramitāyāṃ Saddharmapariṣatā</i>	(5, 6a)	護持正法成身才二
3. <i>Dharmabhāṣakāśītraksā</i>	(6b, 7a)	護法師品才三
4. ( <i>Sūnyatā</i> )		空品才四
5. <i>Śīlapāramitāyāmanarthavarjanāṇāṃ</i>	(7b)	集離難戒学品才五
6. <i>Ātmadhāvaraksā</i>	(8a, 8ab, 8b, 9a, 9b, 10, 11, 12)	護身品才六
7. <i>Bhogaṇaparakṣā</i>		護受用福品才七
8. <i>Papaśodhanāṇāṃ</i>	(13a, 13b, 14, 15a, 15b, 15bb, 16)	清淨品才八
9. <i>Kṣāntipāramitā</i>	(17, 18, 19)	忍辱品才九
10. <i>Vīryāpāramitā</i>	(20)	精進波羅蜜多品才十
11. <i>Āraṇyasaṇṇavarāṇāṇāṃ</i>		說阿闍若品才十一
12. <i>Cittaparkama</i>	(21a, 21b)	治心品才十二
13. <i>Smṛtyupasthāna</i>	(22, 23a, 23b, 24)	念処品才十三
14. <i>Ātmabhāva-pariśuddhiḥ</i>		自性清淨品才十四
15. <i>Bhogaṇapūyāśuddhiḥ</i>		正命受用品才十五
16. <i>Bhadracaryā-vīdhiḥ</i>		增長勝力品才十六
17. <i>Vandanūśaṇṇasāṭh</i>	(25a)	恭敬作礼品才十七
18. <i>Ratnatrayānumatī</i>	(25ba, 25bb, 25bbb)	念三宝品才十八
19. <i>Puṇyavṛddhiḥ</i>	(26a, 26b, 27)	

(括弧内数字は頌の番号。a, b, 等は分説であることを示す)  
これによつても集学論の内容が大乘の菩薩 (*bodhisattva*) の

行たる六波羅蜜の詳説であることが知られるであろう。すなわち

(1) 1. *dāna-pāramitā*

(2) 2~8. *śīla-p.*

(3) 9. *kṣānti-p.*

(4) 10~11. *virya-p.*

(5) 12. *dhyāna-p.*

(6) 13~18. *prajñā-p.*

となるのである。なかんづく(2)の持戒波羅蜜、(6)の般若波羅蜜に勢力の注がれていることを見るべく、ここにこの論の秀でた特色がある。

内容の一端に触れて見よう。この論は新作でも、他に示さんための作でもない。ただ自己修養の資糧に編するのである。凡そ人身は受け難く、仏法は聞き難い。故に信仰の道に急ぎ、早く菩提心 *bodhicitta* をおこすべきである。」(序、取意)

*yadā manau paretśāp ca bhayaṃ duṣkṛtaṃ ca na priyaṃ /*

*tadāmanah ko viśeṣo yatitāṃ rakṣāni netaraṃ //*

わが友とわれ自身と、共に恐怖と苦痛を憎むのに、わが防護のみ図り、ひとの上をなおざりにせば、何の殊勝のありもしつらん。(頌1)

「菩薩の行動の或は罪 (*sin*) となり或は無罪となるその標準は、大乘中に学処 *śikṣā* の中心を発見し、一切衆生 *sarvasattva*

のため「自身と受用と善根」とを喜捨して利他の大行に出て得るか否かにある。」「(集布施学品)ここに小乗の自身のための解脱が「一切を解脱せしめる」という大乘義に転成せしめられて居るのを見る。」「菩薩は、衆生のために一切を抛棄しようとするれば、それ故にこそかえつて自身を護持する義務がある。護身の要は善友 *kalyāṇamitra* を持つことと、經典研究とにある。」「(護持正法戒品)そこには、これを展開すれば実に深くして広い宗教的教養の素地を感ぜしめるものがある。」「自己を護るとは非理・不法 (*魔 māra*) に近づかぬことである。」「惡友を避け、菩提心を失わず、意氣沮喪せず、同朋と僧伽 *Saṅgha* に対する営事奉公を忘れないことである。」「(護法師品)「罪は必らず罰を伴う。婦人に關する罪は最も警戒すべきである。」「正法誹謗の罪もまた重い。」「(空品)「罪を避ける方法として殊に初心者は、(1)名聞利養、(2)交際の喜び、(3)会談の喜び、(4)睡眠、(5)世俗的事業、(6)戲論 *prapañca* を排すべきである。かかる排棄を確保するため、意義ある努力に意をつくし、利他を第一義とし、最も空觀 *sūnyatādarśana* に住すべきである。」「(集薩羅戒学品)ここに著者の思想的立場をうかうべきであろう。集学論は以下積極的に大乘菩薩のあり方を規定し指示していく。

*etat śidhyet sadā amiryā amṛtiśīvara-īdarād bhavet /*

此はつねに念によりて成就せらる。(頌8a)

「正念は正知と相俟ち、正定は戒と相応して不動の一心が建

立される。ここに菩薩は一切衆生に受納されることが出来る。「(護身品) 仏子は尊重さるべく、人の淨信は壊せざるようすべきである。ために語を慎しみ、乞食法に留意し、受食は服薬のごとく信施を受けるにも如法でなければならぬ。」(同上) つぎに諸種の護身の真言 *mantra* が説かれる。つづいて「受用」の保護が明かされ(護受用福品) 清淨品に入つては「身を清淨にするも他に施すため」と示し、

*trijacchamanā yathāśāsyān rogāṇi sīdāṇi mādhathe /  
buddhāṅkuras tālā viddhīn klāśacchanno na gacchati //*

さながら雑草に蔽われし穀類の亡び繁らざるごとく、煩惱に蔽われし仏苗は増長はせじ。(頌1b)

とて、煩惱 *kleśa* と罪垢よりの離脱をすすめる。罪障消滅の法は(1)懺悔 (*kṣama* or *āpatti-pratidesanā*)、(2)善行、(3)禁戒 *vinaya* の説誦、(4)発心し三宝に依止することである。忍辱品に現れた第二十頌は、以下聞法・林住・禪觀を要約した内容をもつてゐる。いわく、

*kyaṇ eta śrutameyeṇa saṃpīṇyeta vanan talaḥ /  
samādhānāya yujyeta bhārayed aśubhādikam //*

忍耐なれ、聞かんと求めよ、次いで森に依住すべし。心、專念に住し、また不淨を觀ぜべし。

と。聞法の力よく煩惱を破らしめ、常に諸仏を現前せしめて隨所に法を聞き得るに至らしめる。在家には過失あるゆえ林住が求められるべく、林住者の生活は觀想である。觀想は無我

の實踐であると説く。食の退治に不淨、瞋の退治に慈悲、痴(無明)の退治に縁生 *pratiya-samutpāda* の三觀が用いられねばならぬ。(治心品) 四念處(身、受、心、法について)の觀法も同趣意である。(念處品) 特に諸法無我について、自性空・六界六処空・諸法空の諸觀が説かれ、空觀、般若の智に契る諸法建立の次第実相が明かされる。(自性清淨品) つづいて「功德の清淨は、空性と大悲心に基く」(*śūnyatākaruṇā bhāva-  
bhacchitā puryaśodhanam*, 頌2b)とし、改めて布施・諸種の徳行・波羅蜜を説く。(正命受用品) さらにこの大悲が建て前となつて殊に功德の増長が図られねばならず、直心・深心に努力精進するによる大悲福行の増長は、一転、諸仏への懺悔・恭礼の隨順行となるであろう。それはまた必然に発願・回向の聖行實踐に至らしめるものとする。(増長勝力品、恭敬作礼品) かくて一論の終結は、菩薩の徳として、信仰を有し、慈悲心を貯え、三宝に恭礼するがその至高の行であるとし、殊に念仏、念法、念僧を詳説して「法施三昧これ菩薩の生活」というに極まつてゐる。(念三宝品)

*siddhīḥ samyak-prahṛṣṭāṇāṃ apramāḍavīryajāni //*

成就は正等なる自己否定、放逸を残さざるにより、また正念正知により、深心によりて生ず。(頌27)

文殊 *Mañjuśrī* への婦命の言葉を最後に集學論全十九章はおわる。予の微力なる、論意を十分に伝え得ないのは寔に残

念であるが、そこに横溢した菩薩の衆生愛精神には巻をおうて三嘆措く能わざらしめるものがある。

#### 四 Vimalakīrti-nirdeśa (維摩經) の引用

前節には主として寂天自作の頌により集學論の要旨を見た。しかしそれは全く便宜上からであつて、全論の宗教的意義や価値はこの自頌をも含めて編著者が意圖した大乘經典の實踐的修得にある。従つて、最も嚴密にはどの經典のどの部分が、しかもどのような視点から採られたかという分析的と同時に総合的な視野に立つてこれを批判するのではなくて、真正な考察とは云えないであらう。然しながら、事實上寂天がこの論に引用した經典は百以上にのぼるのであり、それらの數經に十分通ずるといふことさえ容易なものでない。その点から考えても、これらの經典を自由自在に駆使し得たと考えられる著者は、余程の達者であり、菩提心に篤いひとであつたとしなくてはならない。試みに集學論が引証している經典を分類して見ると、

sūtra(經)	45	pāramitā(波羅蜜)	3
paripichea(所問)	9	nirdeśa(所說)	2
parivata(草、經)	6	avadāna(譬喻)	2
dhāraṇī(陀羅尼)	4	gāthā(偈)	2
mokṣa(解脱)	4	その他	27
piṭaka(藏)	3	Total	107

となる。中國およびわが国では「經」という言葉の使いか

たが、必ずしもインドほど嚴密でないと云える所がある。所問(paripichea)經は、所說(nirdeśa)經と共に初期大乘に比較的多い經典形式であるが、あからさまに sūtra (經) と称せられたものに次いで多數採られている。その他、陀羅尼(dhāraṇī 總持)の引用の比較的多いことなども注目すべきであらう。最も多い sūtra の部類ははじめ全引用經中、さらに引用回数<sup>10)</sup>の比較的頻繁であるのは順次つぎの諸經である。

- (1) Ratnavega (寶鼓經) 26
- (2) Dharmasaṃgīti-sūtra (法集經) 21
- (3) Ugraparipichea (毘舍鞠師問經) 20
- (4) Aksayamati-sūtra (無盡意經) 19
- (5) Candrapīpa-sūtra (月燈三昧經) 18
- (6) Gaḍḍavyūha (大乘密鼓經) 12
- (7) Bodhisattva-pratimokṣa (菩薩別解脱) 10
- (8) Sāgarasamati [paripichea]-sūtra (海上意菩薩所問淨印法門經) 10

- (9) Gaṇagaṇḍya-sūtra (四十華嚴、入法界品) 8
- (10) Ratnakūṭa (寶樹經) 8
- (11) Ratnacūḍa-sūtra (宝髻經) 8
- (12) Vimalakīrti-nirdeśa (維摩經) 7
- (13) Taṭhāgataguhya-sūtra (如來秘密經) 7

これらの諸經中、比較的經典としてのまとまりをもち、初期大乘を代表するものの一つであるのは集學論に 'Ārya-vimalakīrti-nirdeśa' の名においてしばしば引用している漢訳



れて「維摩詰所説經」と稱するものであらう。(前掲12) この經はインド・中國・日本にかけて広く且ながく行われた經でもあり、經自体に「戒經」としての特色を具えるものでもあるから、考察の便宜上これに即して集學論の特質を指摘し、あわせてこの論の批評をしていくこと<sup>12)</sup>したい。はじめに維摩經の大乗經としての特色やその地位を考え、つぎに集學論に引用された箇所<sup>13)</sup>の意義や全体的関連を眺めるのがよからう。

なお、ついでながら云えば、維摩經の梵語原典は現在すでに失せてこれを見ることが出来ないものであるが、集學論に引用された部分は、維摩全經に比すればもとより小範圍であり且断片であるのを免れないにもせよ、兎も角仏典を原語によつて調査研究しようとする者にとつては、かけがえのない貴重な資料であると云つてよい。

維摩經の中心思想は、在家の長者である維摩居士 (Gautami) なる者が、菩薩道 bodhisattva-marga を種々の角度から説くという趣向のもとに、仏の代理として登場する文殊 Manjushri 菩薩に智慧 (prajñā 般若) の立場を代表させつつ慈悲 (karuṇā) 方便の行を展開するうちに、不尽有為・不住無為の中道 madhyamā を大乘究極のものと明す所に示される。維摩 Vimalakīrti (毘摩羅詰、無垢稱、淨名) の説であるということからこの經は nirdeśa (discourse, 所説) と呼ばれるのであるが、nirdeśa は法の説かれる様相を示すのみで、それがために「仏説」たる実を失うことであつてはならない。經の

首尾は、仏座 (毘耶離 Varāṇasī 城外の菴羅 Tāmra 樹園) における釈尊の直説であつて、維摩の方丈における説も仏の認承を受けるし、また維摩の本地が妙喜国の無動 Akṣobhya (阿閼) の仏のもとにあることが語られているによつてもそれは明瞭であらう。<sup>13)</sup>

この例を以ても集學論の引く經典や論文は一応みな「仏説」たる權威とその実を具えるものと解してよい。

つぎに多少内容的に維摩經を見ていこう。維摩は病氣である。文殊がそれを慰問する。慰問とは自身の病氣を見る智慧をめぐむことである。病氣にありつつ病氣を超える目を与えることである。それがこの經では端的に空觀として表明されしかも病める維摩その人の口から自身の病いを「調伏」(vinaya) する法が説かれ、有疾の菩薩を「慰喻」する仕方が語られる。そこには多分に律の性格に属する問題に連繋する事態から發する戒説が為されていると考えてよい。維摩の病氣は、衆生の災病に對する菩薩としての応病である。

從<sup>14)</sup>痴有<sup>15)</sup>愛、則我病生。以<sup>16)</sup>一切衆生病<sup>17)</sup>、是故我病。若一切衆生得<sup>18)</sup>不病<sup>19)</sup>者、則我病滅。所以者何、菩薩為<sup>20)</sup>衆生二故、入<sup>21)</sup>生死<sup>22)</sup>。有<sup>23)</sup>生死<sup>24)</sup>、則有病。若衆生得<sup>25)</sup>離病<sup>26)</sup>、則菩薩無<sup>27)</sup>復病<sup>28)</sup>。(文殊師利問疾品)

Aus der Torheit entstand die Liebe, und das ist der Grund meiner Krankheit. Seitdem alle Wesen krank sind, bin auch ich krank. Wenn sie geheilt sein werden, werde auch ich ge-

belt sein. Und warum? Ein Bodhisattva tritt in das Werden und Vergehen um aller Wesen willen ein; wo Geburt und Tod sind, da ist auch immer Krankheit. Wenn alle Wesen von Krankheit frei wären, dann wäre auch der Bodhisattva frei davon. (14)

菩薩の病氣はひとえに「大悲」(mahākaraṇa)から起るのである。そしてこれは経初、仏國品の心淨則土淨の理説にも契う空解に立つ衆生愛の具體的表明である。この經にはかかる立場から「菩薩の行」(bodhisattva-carya)が種々に説かれていく。われわれはそこに前述した寂天の自頌に非常に近い或は殆んど相等しい思想を見出すのである。

成經として維摩を眺めた場合、「声聞道の戒律觀を排して大乘菩薩戒の方向を力説する」ものであることが知られる。殊に興味あるのは、釈尊の諸弟子中「持律第一」の名声ある優波離 Upāli が、不法行為を犯し滅罪の道を誤ねる二僧に対し、律法の規定通り委細教えている現場へ維摩が来て、眞の滅罪は罪性不可得と観じ、無妄想の清淨に住立せしめるにあるとして「空の知見」こそ眞の奉律で、律法を善解するものであると説いた所には、般若經の空觀の戒基に発するものがあることである。經、弟子品に出るこの説話は、更に一個獨立の「Uṇhī-paripiccho」(優波離所問經)になつて集學論にも四箇所に引用を見ている。舍利弗 śāriputra が「床座 (śayana) の問題」、「食事」(Essen)の問題でその都度維摩から受けた有

所得の見解への批判と指導も優波離に對すると同じ根源から出ていた。しかも大乘仏教としては一切皆空・空亦復空として、つねに真空より妙有に展開することを忘れない。そこに仏教の眞生命がある。

さて寂天はこの經のどの部分をどのような目的で集學論に引証して居るであろうか。順次見ていきたい。

I yathā tīvādāryavimalakīrtinirdīṣṭyaṁ sumeraśaṇṇaṁ satkāyaḍṭṭimutpadya bodhicittamutpadate | itaśca buddhadharmā virohanti ||

例えば「聖維摩羅詰經」に示さるる如く、ひとその我慢心を須弥 (Sumera) 山ほど高からしめんも、なお菩提心 bodhicitta は起し得るなり。かくてまた仏の法は存し得ることなり。

II rathāryavimalakīrtinirdīṣe 'pyuktam | Samparabhayabhīrena kin praisartavyam | āha | samparabhayabhīrena māṇuṣīr bodhisattvena buddhamāhātmyaṁ praisartavyaṁ | āha | buddhamāhātmyaṁ praisartavyaṁ | āha | buddhamāhātmye sīhātukāmena kura sīhātavyaṁ | āha | buddhamāhātmye sīhātukāmena sarvasatvasamāyāṇ sīhātavyaṁ | āha | sarvasatvasamāyāṇ sīhātukāmena kura sīhātavyaṁ | āha | sarvasatvasamāyāṇ sīhātukāmena sarvasatvapramokṣāya sīhātavyam ||

かく「聖維摩羅詰經」においても亦云わる。(1) (文殊云う) 輪廻 saṃsāra を恐れたるは何れに依るべきや。彼(維摩)云う。文殊よ、輪廻を恐れたるは、仏陀の大精神に依

るべし。(2)彼云う。仏陀の大精神に依らんとするは何れに心を住せしむべき。彼云う。仏陀の大精神に依らんとするは、一切衆生への平等愛に住すべし。(3)彼云う。一切衆生への平等愛に住せんとするは、いずこに住すべき。彼云う。一切衆生への平等愛に住せんとするは一切衆生解脱のためはたらくべし。

III tathāyavimalakīrtinirdēśe | parisuddhabuddhakṣetropapattaye sarvasattveṣu āśtrīpremokāṇa | lokaprasādanuvakṣāṛhāṇa | tvāsanapādaprakhyālanakarma kurvātāpi cetasaḥ staisu vākya-  
gopāpṛpṛṣṭeṣu vā vinipatīṣṭu bodhisattvena premagaura vāhy-  
āśaḥ kīryaḥ ||

かく「聖維摩羅詰經」に云えり。仏陀の浄土出現のため、師たるかの如き情愛もて一切衆生に臨む。されば世の和安を保たがため、もしは口、もしは足のすぎにだに菩薩情愛を持ち、もしは婦女、もしは不幸と苦難に陥れるに敬心を留とすべし。

IV tathā cotamāyavimalakīrtinirdēśe | abhitaparikalpasya kiṃ mūlaṃ | āha | vipanyasā samjñāmūlaṃ | āha | vīparvasāṭṭh samjñāyā kiṃ mūlaṃ | apratīṣṭhāṇaṃ mūlaṃ | āha | apratī-  
śṭhāyā kiṃ mūlaṃ | āha | yanmañjuṣī pratīṣṭhāṇaṃ na tasya kīḥcāmūlanti | hyaparīṣṭhāṇāmūlapratīṣṭhāṇaṃ sarvadharmā  
iti ||

またかく「聖維摩羅詰經」に云わる。(1)(文殊云う)不生(非存在)を計量(假定)するは何れがもととなりや。彼(

維摩)云う。そのもと、誤れる思考にあり。(2)彼云う。誤れる思考のもと何れにありや。そのもと何れにも由らず。(3)彼云う。(由らざる)このもとは何ぞや。彼云う。文殊よ由らざるところ、何らの根なし。かく凡ては支持なき根にさかえられたり。

V (1) yathoktamāyavimalakīrtinirdēśe | punaraparaṇa bhā-  
anta śāriputra ye pravāsantāṇa gṛhaṇa teṣāṃ samanant-  
arapraviśyānāṃ sarvakleśā na bhādhante | yaṃ dvitīya  
āścaryābhūto dharmah ||

「聖維摩羅詰經」に説くごとし。敬愛する舍利弗よ、誰にもせよこの家(室)に入るは、彼ら入りおわらば既に自らを悩ます苦悶なし。これ第二の奇蹟なり。

(2) punararavoktaṃ | āha tato bhogaṇḍisatvāyā sū paṣ-  
artīpiā bhūti | na ca tat bhogaṇḍaṃ kṣīyate | yausca  
bodhisattvaṇaḥ śravakausca śakrabrahmaloka-pāṇastāda-  
yaṃśca satvaustadbhogaṇḍaṇaṃ bhuktāṇaṃ teṣāṃ tādṛśīṇaṃ  
sukhaṇaṃ kāye | vakṛāntaṇaṃ sarva sukhamaṇḍīyāṇaṃ loka-  
dhātāu | bodhisattvaṇāṃ sukhāṇaṃ | savayomakūpamasya  
teṣāṃ tādṛśo gandhaḥ pravāti | tadyathāpi nāma tasyā-  
meva sṛvagaṇḍasugandhūyāṇaṃ lokadhātāu vīkṣyāṇaṃ gā-  
ndhaḥ ||

復た同じ場所に云わる。そこに一座を満腹せしめしその食の、なおためにその量を減することなし。しかも菩薩・弟子・釈提桓因・梵天の護持神等およそかの食を得たるは、

体内に大いなる欲びおぼえ、さながら欲満の世界なる菩薩のごと感じたり。すべてその毛孔より芳香いで、たとえは香積の世界なる樹木の発するその如くなりき。

(3) *punaścetan | yauśca bhadantānānda bhikṣubhīranavakrān-  
tunīyāmauretabhojanān bhuktān teśāmevāvakrāntānī-  
yānān parīṇāmyati | ye | yauratpāditabodhicittān  
satvaṇ paribhuktān teśāmutpāditabodhicittān parī-  
ṇāmyati | yaurutpāditabodhicittaurbhuktān teśān nāpra-  
tilabdhaśān parīṇāmyati viśārāḥ ||*

復たかく云わる。わが兄弟、敬愛する阿難よ、この食を得し者、もし正定聚 (*nīyama*) に達せずば、これに達せしとき消化せむ。菩提心 (*bodhicitta*) を発せしは、聖なる平安 (忍辱 *kṣānti* ならざるなし) に至るまで消化されざるべし。これその (食の) 実質なり。

VI *taḥāyavimalakīrtinirdeśe 'pyuktān | saddharmacakra-  
vartanamahāpari vāgasampdarāṅgocārāca bodhisatvacaryā  
'tīyāṅgocārācāyamapi bodhisatvasya gocara iti ||*

かく「聖維摩羅詰經」に亦云えり。善法の車 (*saddharma-cakra*) 転じ、大涅槃 (*mahāparinirvāṇa*) の表明さるるその境域、菩薩の徳棄てられざるその境域、これまた菩薩の境域 (*bodhisatvasya gocara*) なり。

VII *yathāyavimalakīrtinirdeśe bodhisatvagunā uktastathā saṅg-  
hānusmṛtibhāvyā |*

菩薩の徳 (*bodhisatvaguṇa*) に関し「聖維摩羅詰經」に云われたる如く、われら教団の憶念 (*saṅghānusmṛti*) をしつつくべし。

(1) *sarvasatvāna yaṇūpā ruteḥgośāca īritiḥ |  
ekakṣeṇa darśenti bodhisatvā viśāradāḥ ||*

一切衆生の全相、その声、その語いかならんも、菩薩、一刹那にこれを演ずるほどに聰明なるべし。

(2) *te jīva vyādhitā bhonti mṛtāmānā darśayī |  
satvān paripñā māyādharmā vikṛdītāḥ ||*

彼みずからに老い、病み、また死を示す。衆生成熟のため幻影の外相、演じつつ。

(3)……(24) (紙面の都合で原文と訳とを凡て略する)

(25) *na teśān kalpakopiḥhiḥ kalpakotiśatur api |  
buddhānapi vadodbhītu gūṇātāṇ sūvacobhaveda iti ||*

幾百万年にも、一億年にもあらで、仏のたまう時にだにその (菩薩の) 徳につきての心地よき話には、果てしあるまじ。

集學論の維摩引用は以上の如くであつた。

これを夫々の位置において眺めて見よう。(数字は大正藏頁数)

引用	Sikṣasamuccaya	漢訳集學論	Vimalakīrti-nirdeśa (維摩經)
I	chapter 1	存 (76b)	仏道品才八 (549b)
II	7	存 (103b)	觀衆生品才七 (547c)
III	7	存 (105b)	香積仏品才十 (553b)
IV	14	存 (126b)	(梵漢二内容の相違著)
V	15	欠	觀衆生品才七 (547c)
VI	15	欠	觀衆生品才七 (548b)
VII	15	欠	香積仏品才十 (552c)
VIII	18	存 (136b-137b)	菩薩行品才十 (553c)
			問疾品才五 (545c)
			仏道品才八の偈大半 (550a-b)

要するに集學論は、發菩提心・度衆生・衆生愛・諸法空觀・入室離垢・香飯化益・菩薩道行・普現色身等の理説において維摩經の援用をなしているのである。そしてこれらの問題は、前述の集學論の要旨に照しても菩薩道の基本に関する事柄であつた。また同時に、空觀にもとづく衆生愛と度衆生の大悲行に直接關説した要句が維摩から引かれて居ることに於いて、維摩經にとつても本質的な教理思想の開發であつたと云えよう。

## 五 結 論

集學論の編著者であり、インド Nāgārjuna-Akṣaṇḍī (那爛陀寺) の大学匠たる寂天は、他面において「入菩提行」(Bodhi-

carvāṇa) の著者であつた。それは全篇一千有余の偈より成る宗教詩で、菩提行の勧発が切々誦する者を動かさずんば止まぬ情熱を以て力強く高調されて居る。

保護なきものに保護、

路行くものには導師となり

彼岸に渡らんとするものには船、

堤、橋たらむ。

燈を欲するものには燈と、

臥床を欲するものには臥床と、

一切有情のために吾はなるべし。

(Chapter III, 17, 18)

こうした宗教的心情と実践的意欲は、ここには直接の目的でないのと長文のため多くを引用することは出来ないが、寂天が集學論の「念僧宝」の項に収用した維摩經仏道品の偈に示されたものと全く一致する。従つて寂天に対する維摩の影響には形式・實質両面から決定的なものがあつたといふことができるであらう。翻つて聖典の要句を類聚することは古今その例の無いことではない。殊にわが源信の往生要集、親鸞の教行信証の如きは、浄土往生を志願する者の立場における經論の文類抜抄として寂天のそれに甚だ相似たものがある。

既に見た如く寂天が置かれた歴史的社会的地位はインド仏教として最後の運命を担われたものであつた。彼が果してこ

れを自覚しその重任を担い切ったかの問題はなおその真解決を今後に残すけれども、以上によつて明かにされたことはインド仏教が僧伽 *saṅgha* において栄え、同時に僧伽において亡びたことである。寂天の高調する菩提心 *bodhicitta* や菩薩行 *bodhisattvacarya* は、思想的には般若空觀の教理に裏付けられて初期大乘以来存したものであるがその真実々現には「僧伽」の限界はもはや越えられねばならなかつた。そこにかかる教理思想そのものの移植として中国の「法」仏教があつた。中国には禪苑や念仏社の形においてなお「僧伽」への志向が見られたが、日本仏教は「三宝」をも「ほとけ」と表象するほど帰依仏の一路に大乘仏教の真特色を発揮した。それは聖徳太子——伝教大師——鎌倉仏教の一線に見られる一大乗仏教の高揚である。太子の採られた三經には、勝鬘の仏、法華の法、維摩の僧の趣意が伺われる。同時にこれを三學として云えば維摩の慧、法華の定、勝鬘の戒の特色である。維摩の「僧」が空慧に即すると共に、勝鬘の戒精神がかえつて「仏」中心の宗教へのよみがえりを見せていることは、僧仏のことわりとして民族性の特質にもよることであろう。集學論は今日改めて學問上の検討を受けて居るが、寂天の存命した時代は中国では唐、わが国では奈良時代である。維摩が民衆的に大きな感化や影響を与えたのは中国や日本ではむしろそれ以後の時代であつた。しかしこの経はそれ以前インドにおいて既に深い尊信を受けていたことが集學論の検討を通じ

て実証された。仏教の宗教的真理は、今後學問の新たな方法によりその普遍性を明証していこう。集學論が内蔵する大乘戒の思想と精神の如きも、恐らく行詰れる現代世界が救いの光として仰ぐべき大生命の一たることを信じて筆を擱く。

註

- ① *adhiśṭhāṅikā* (増上心學—定) *adhiśāṅikā* (増上戒學) *adhiprajñāṅikā* (増上慧學)
- ② *Bibliotheca Buddhica: ŚIKSHĀSAMUCCAYA, A Compendium of Buddhist Teaching compiled by ŚĀNTIDEVA chiefly from earlier Mahāyāna-sūtras, edited by Cendall-St. Petersburg.* 本書は I. (1897) II. (1898) III. (1901) IV. (1902) の分冊出版された。Indian Texts Series: *Śikshāsamuccaya, a compendium of Buddhist doctrine, translated from the saṁskṛit by Cecil Bendall and W. H. D. Rouse, London, 1922* は英訳で、C. Bendall の歿後 D. Rouse が完成。研究書には Calcutta Oriental Series no. 23: *Aspects of Mahāyāna Buddhism and its Relation to Hinayāna by Nalinaksha Dutt, London, 1930* 所収 *The Vinaya of the Mahāyānist* (PP. 290-322) が最良ならん。いま梵語原典および英訳書は金沢大学晩鳥文庫本を使用。整理中の兩書をしかも長期に借覽せしめられた図書館の好意を謝す。漢訳は大正新脩大藏經第三十二卷「論集部(全) PP. 75-145」に収む。
- ③ 宇井伯寿博士著「印度哲學史」(昭和七年)
- ④ 前掲書、目次一一四頁

- ⑥ 同、(本論)五四—一二頁
- ⑦ 星界愛氏は、「中觀派ブラーサンギカに属」し、「A・D・六八五—七四五」の人とする。(大谷学報才十九卷才二号、所収「入菩提行 (Bodhicaryāvatāra) の所説による寂天の著述の決定と、それに引説せられたる龍樹の著書に就て」参照)
- ⑧ 聖月仏教大辞典、4 PP.327-4
- ⑨ 中野義照師「大乘集菩薩學論解題」一二頁(国訳一切経、瑜伽部十一所収、昭和十年)参照。その他本稿を成すに本書に負う所多し。
- ⑩ N. Dutt の前掲書には Kalyāṇamitra (勝友) をはじめとして Vajravarīya-bhikṣu (尊風僧) Monier Williams, Sanskrit-English Dictionary P.1024, 衣類(dress)食物(food) Yācika (乞語) Kāyika (身体) Dhutavādins (頭陀行) 懺悔滅罪(atonement) Āpatitis (違犯) 菩薩戒 (Āpatitis peculiar to Mahāyāna) を「集學論」の訓練要綱 (disciplinary rules) として解説する。
- ⑪ 宮本正尊博士著「仏教学の根本問題、才三「大乘と小乗」六五七—六八六頁、龍樹時代の大乗経典の類型」(昭和十九年)参照。
- ⑫ 大正新修大蔵経才十四卷に現存維摩経三經(支鼓、羅什、玄奘各訳)を載す。什訳による英独訳あり。拙著「維摩の再発見」P.95(昭和三十年)および⑬参照。
- ⑬ 大野法道博士著「大乘成経の研究」(昭和二十九年)にも本研究は負う所少なからず。博士は「大乘成経各説」に維摩諸所説経の系統(P.P.111-121)を特設された。
- ⑭ vimala (離垢、清淨) は元來、戒の理念であり、kṛti (称名) には菩薩の徳がこめられる。従つて維摩経そのものが菩薩戒の趣意を具える。前掲拙著参照されたし。
- ⑮ Das Sutra Vimalakīrti (Das Sutra über die Erlösung), übersetzt von Jakob Fischer und Yokota Takezo, Tokyo, 1944, S.83.
- ⑯ (15) 泉芳瑗氏著「仏教文学の鑑賞—仏教經典を中心としての—」一七二頁(昭和十七年)参照。なお同氏は才二次に維摩英訳を完了した人。前掲拙著を見られよ。
- ⑰ 現在なお真宗教徒が勤行用に「正信偈」が元來、教行信証の行巻末に付した念仏偈であることは周知である。
- ⑱ 維摩の史的位罫について宮本博士編「大乘仏教の成立史的研究所」(昭和二十九年)参照。

# 附 記

本稿は「三経義疏の思想的研究」に対する文部省科学研究費に本づき、その才二部維摩経義疏研究の一環としてなされた才一部三経義疏の真理説は、東京大学宗教学講座五十周年記念日本宗教学会大会(昭和三十年十月)に発表。

本稿校正中、京大人文科学研究所報告「摩訶経研究」(昭三〇、塚本善隆博士編)届く。摩論の著者僧肇は維摩により仏教に帰す。その註維摩は太子疏も深く拠れり。初期中國思想史上維摩の地位本書により明確となる。附載凸版「夢庵和尚簡釈摩論」は金沢文庫旧蔵、いま尊経閣所蔵なるも注意すべし。